

シンポジウム報告書

文責：加藤久美子（企画者）

【シンポジウムタイトル】 Maritime Communities in Practices of Skill, Knowledge, and Ritual: Some Cases from Sulawesi, Indonesia（技術・知識・儀礼の実践から、海の共同体を考える—インドネシア・スラウェシ島周辺における事例を中心として—）

【日時】 2020年12月6日13時~17時

【プログラム】

第一部 (13:00-)

基調講演:**Farish A. Noor** (Associate Professor, Nanyang Technological University)

"The so-called 'War on Piracy' in 19th Century Southeast Asia:

How the Maritime Culture of Southeast Asia was Damaged During the Era of Colonial Expansion"

第二部(14:00-) 同時通訳付き (JP⇒EN)

第一発表者:**明星つきこ**（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課）

「南スラウェシ州・コンジョ地方における木造船づくりの技能と実践」

第二発表者:**中野真備**（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻博士一貫課程）

「中スラウェシ州・バンガイ諸島サマ人の外洋漁撈における民俗技術とその実践：近代化と移動性の影響に着目して」

第三発表者:**加藤久美子**（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻博士課程）

「南東スラウェシ州のバジョ集落における儀礼の実践：日常における儀礼の役割」

ディスカッション (15:15-) 同時通訳付き (JP⇔EN)

コメンテーター:**飯田卓**（国立民族学博物館教授）、**関恒樹**（広島大学教授）

本シンポジウムは、海と密接な関わりを持つ人びとの生活における日常実践を儀礼・知識・技術の3つの側面から明らかにし、そこに携わる人びとの動態から、海の共同体のあり方を探ることを目的とした。

近年の海民研究、特に東南アジア島嶼部の研究では、海洋民が築き上げてきた広範な交易や移住に基づく海域ネットワークが注目され、海洋民の特質とされた。この議論を基盤として、現代の（違法/合法的な）越境移動や広範な人びとの繋がりについて、海民ネットワーク社会から読み説くという試みがなされてきた。

しかし、このようなネットワーク論的研究は、ヒトとモノの移動に注目して、東南アジア島嶼部海域に生きる人びとの特質をマクロな視点から捉えるものであった。そのため、移住（係留）地における日常実践というミクロな視点からの議論は減少している。そこで本シンポジウムは、これまで議論されてきた海域ネットワーク社会を踏まえて人びとの動態を

ローカルな視点から再検討し、海の共同体への新たな視座を見出すことを試みた。

第一部の基調講演ではナンヤン技術大学 (Nanyang Technological University) から植民地期の東南アジア近代政治史を専門とする Farish A. Noor 先生をお招きし、19 世紀、植民地期の東南アジア海域におけるヨーロッパ勢力と海に住まう人びとの歴史的動態についてお話頂いた。ここでは、19 世紀の植民地支配及びヨーロッパ勢力の進出によって東南アジア海域とそこに住まう人びとのステレオタイプが形成されていく過程が明らかになった。19 世紀初頭、西洋世界において地政学的な争い (geo-economic and geo-political rivalry) が顕著になる中でその矛先が東南アジア海域を含む植民地にも向けられた。その過程で場所にとらわれず、海を拠点に生きる人々は「Piracy (海賊)」として認識されていく。さらにここに描かれる「暴力的、野性的」といったネガティブなステレオタイプは、海の「安全」を守るために「海賊」と対峙し、支配することを正当化した。Noor 氏は、この政治的に偏った認識は、現在も再生産され続け、現在も、東南アジア海域にある海のコミュニティとその繋がり、ダイナミクスと意義は看過され続けていると指摘した。

第二部では、海のコミュニティのあり方について日常実践に焦点を当て考察する三つの研究発表が行われた。それぞれの発表では、造船技術、漁撈知識、儀礼実践を軸に、人びとの日常的な実践動態、習得過程、その実践に纏わるコミュニティ形成と動態のあり方が報告された。第一発表の明星は、南スラウェシのコンジョ社会における造船技術の習得過程において複数の造船所を巡回しながら得られる知識や技術、ネットワークに着目し、複数のコミュニティが人びとの移動と交流によってさらに広範囲なコミュニティを形成している動態を報告した。第二発表の中野は、漁撈に纏わる漁場の知識がどのように人々を「サマ」あるいは「サマでない」と定義づけているのかを考察し、漁場への参与によって定位される「サマ」コードを明らかにしようと試みた。第三発表の加藤は、儀礼実践に着目し、儀礼の参与によって受容される他集団と定義される「バジョ/サマ」の定位を考察した。そこでは、儀礼の根幹を担う海に棲むキョウダイ霊を含んだ血縁集団が想定されているため、ひとびとは、「他集団出身者」を「バジョ/サマ」として受容していることを指摘した。

ディスカッションでは、コメンテーターに、長年マダガスカルの漁民文化に関する研究を行ってきた飯田卓教授 (国立民族学博物館)、フィリピンのビサヤ漁民社会について人類学的研究を行ってきた関恒樹教授 (広島大学) を迎え、海域ネットワーク社会を繋ぐ共同体形成のあり方について、アフリカやフィリピンという異なる地域、国家の専門家との意見交換を行い、地域の括りを越えて海の共同体を検討することができた。このシンポジウムを経てそこに見出せる人びとの交流、海域ネットワークを繋ぐそれぞれの係留地における人々の動態を日常実践から示すことができた。さらにディスカッションを経てこうしたコミュニティのあり方を海の共同体の特質として提示するだけでなく、新たな人びとのコミュニティのあり方として捉え、より深く理解することができた。ここで得た知見を活かし今後の研究をより広い視点を持って展開していきたい。